

対談 宇江敏勝・中上健次

## 熊野の自然、風土、歴史

一九九〇年三月二十一日

於 熊野速玉大社双鶴殿 記録：茨木和生

辻本 宇江先生のご紹介をさせていただきます。先生は一九三七年に三重県尾鷲市のお生まれでして、和歌山県立熊野高校ご卒業後、紀伊半島の山中で林業労働に従事するかたわら、執筆活動が続けていらっしやいます。主な著書に『山びとの記』『木と人間の宇宙』全三巻、『炭焼日記』などがございます。一番新しいご本に、『木の国紀聞』というのがございます。先月の毎日新聞でしたでしょうか、「二十一世紀の山里」というようなタイトルで、森林が非常に荒廃して、深刻な問題になっているという文章をお書きになっていたと思います。

それでは宇江先生、中上先生よろしく願います。

宇江 私はいっこうにこんなこと慣れていませんので、今晚は中上さんにおんぶにだっこになると思いますが、よろしく願います。

中上 宇江さんは、みんなに、そうだね。今日はとりあえず二人で対談して、それで熊野あるいは紀伊半島、あるいは紀伊半島を中心とした日本、あるいは日本を中心としたアジアみたいなもの、どこまで拡がっていくかわからないんだけど、突っ込んで楽しく展開してみたいと思うんですね。実のところ、宇江さんとお会いするのは初めてなんです。何度か、いつかお会いできるかなあと思っていたら、そういうチャンスもあっただけで、逃がしてしまって、こういうことでお会いすることになったわけです。宇江さんは『VIKING』にいらしたんですね。

宇江 そうですね。『VIKING』では富士正晴さんが中上さんのことをおっしゃってましたけど、富士さんに会わずじまいですか。

中上 ええ、ぼくは遂にお会いできなかったんです。ええとね。富士正晴さんの妹さんというのか、たしか野間宏さんの奥さんですね。野間宏さんを通じて妹さん、つまり、富士さんの妹さんの方は存じていたんですが、富士さんご本人にはお会いできなかったんです。とにかくその、富士さんは紀州のことにごく関心を持ってましたよね。

宇江 そうですね。とくにぼくなんか、高等学校を出てすぐに富士さんのところへいったときに、非常にかわいがってもらって。でも最後までかわいがってもらって。ぐうぐういっかうにかわいがってもらったかという、宇江は字のないのが取り柄やなあ、と誉めてくれたりして。(笑)

中上 そうですか。たしか『VIKING』では、宇江さんは津本陽さん、彼も『VIKING』

の出身ですね。たしか、『深重の海』が『VIKING』に載っていて、ぼくはあれを『VIKING』で読んで、すごい感心して、いい作家でたなあと、ぼくは思ったんですね。お年はぼくなんかより上ですけどね。

宇江 そうですね。津本さんは『VIKING』に入られたのは、たしか三十七歳ぐらいで、その時から文章を書かれたそうですね。ですから、『VIKING』の経歴からいえば、ぼくなんかの方が先に入ってるんですね。けど、あの人、不思議な人ですね。

中上 おそらく、富士正晴さんにとって、紀州のイメージというのは、ぼくより宇江さんとか津本さんのイメージであったと思うんですよ。それで、ぼく小説を書いたときね、手紙をいただきましたね。紀州の男はエネルギーがあつてすごいなあつていう手紙が来たんですけどね。おそらくそれは宇江さんのことだったんじゃないですか。本当は。

宇江 いや、中上さんにずいぶん関心があつたみたいですよ。

中上 その当時から、ずっと山で木伐りをなさつてたんですね。

宇江 そうですね。ぼくは中上さんと文学の話をしたらヤバイと思うんで、なるべく山の話を見せていただきます。ぼくは尾鷲の生まれなんです。それで、まだもの心つかない頃、尾鷲から志古へ、両親が炭焼きですから、志古へ船できましたね。新宮からモーターにのって、志古の山に入って炭を焼いて、またそれから日足ひたりへ行って炭を焼いて、と。だから、親が日足で炭焼きをしていた頃は、親が焼いた炭は川舟で、だんべで下りますから。まだ、いかだもありました。

中上 それを新宮の方に持つてくるんですか。

宇江 もちろん、みんな新宮へですね。そういう幼時体験があつて。それから、家は中辺路で、日置川流域ですけれども。高等学校出てから、また山へ帰りまして、親と一緒に炭焼きをしたんです。そうですね。日足でも二十二、三の頃まで炭焼いてました。それからあと、十津川とか果無はてなしとか、つまり熊野川流域で

十四、五年、熊野川の水飲んで、熊野川へ小便しよんすをしてやってきますから、なんか、非常に親しみというか、臍の緒でつながっているというか、なんともいえない不思議な感じを持っていますね。

中上 ぼくもですね。ご本人が不思議な感じをお持ちになるのは、ぼくなんか、とくに、ぼくは宇江さんのことを考えますとね、すごく不思議な人だと思うんですよ。宇江さんから見ると、ぼくも不思議な人間に見えるかもしれないけれど、ぼくは、炭焼きをやったとか、その、普通に東京へ出て、そこでぶらぶらして、そのうち小説家になっている。もともと詩を書いたりしていたんだけど、普通の

文学少年のなれのはてみたいな形ですけどね。宇江さん、そういう形とはちがうでしょう。ぼくよりもっとくつきりとしていますよね。いつくらいから小説を書きになったんですか。

宇江 ぼくは最初は、短歌とか詩をやっていたんですけど、小説のようなものを書いてみたのは三十前後のころですね。

中上 『文学界』に転載なった作品がありましたね。あれが第一作か第二作ぐらいですか。

宇江 あれは、二、三作目ぐらいじゃないですか。

中上 そうですか。ぼくはそれが不思議な、いつてみれば、ぼくもそうだし、宇江さんもそうだけど、紀州出身の人間っていうのは、文物から、あるいは本から、あるいは大学から小説の方にいったとかね、一ことばを大学からもらってきたとかね。そんな、本からもらってきたのではなしに、現実の、なまの、つまり、なまとの格闘からことばを貰ってきた、ということあるでしょう。ぼくも普通の文学少年だったというけど、東京へ行って、毎日毎日ジャズ聞いて、くだらんことやってたんですよ。学校へは行かなかつたし、もちろん本はその都度読んでたんですけどね。それから、筆一本では食えないから、詩を書いたり、小説を書いたりしてただけど、食えないから、今度はそういう生活やめて、羽田で、飛行機の貨物専用便があるんですよ。その積み降ろしをやってただけどね。そのようにして、なまでことばを鍛えて、あるいは現実からことばを貰ってきて、小説に組み立てて、自分の世界をつくったみたいなどこあるんですけどねえ。宇江さんもそうですねえ、確実に。

宇江 そうですよねえ。我々の時代は高等学校出たらすぐにホワイトカラーになるというのが、一般的な風潮やったでしょう。そういう高等学校を出て、山へ炭焼きに帰ってくるというのは、ほかに例がなかったですねえ。全くないですねえ、しかし、山へ帰ってくるというのが、非常に自由な世界に帰ってくるというか、山に帰って腕のいい炭焼きになろうということと、本もすっかり読んできたということが、非常に明るい、いい感じとしてもって帰ってきましたねえ。

中上 山っていうのは、ここは新宮ですよ。山から見るとっていうと、新宮っていうのは大都会じゃないですか。

宇江 そうですよねえ。

中上 おそろくそうですねえ。東京から来て新宮を見ると、すごい田舎だなあと思つて。田舎だなあというと、新宮の奴、みな怒るんですけどねえ。だけど、果無のあたりから見ると、すごいんですね。いまは、どちらにお住みですか。

宇江 今は中辺路です。

中上 その中辺路のあたりから見ると、新宮というのは、すごい大都会でしょう。宇江 そうですよねえ。二十二、二三のとき、日足で炭焼きしていた頃、月に一回位、

新宮へ遊びに来るんですよ。それで、その辺の飲み屋や本屋をまわって、というのが何ともいえない解放感でしたね。

中上 逆にぼくらは、こっぴついう新宮も大都会だとしますとね。新宮の人間が中辺路の方へいくと、それこそ、夕方になるとむささびが出てきたり、それから狸が道を走ってたり、そういうのを見て、むしろそっちの方に解放感みたいなのを感じますけどね。そんなの初中で、珍しくはないんですよ。

宇江 そうですね。それから、ふつう町の人が、新宮の人が奥見たら、みんな一様に山と思ってるんですよ。ところが、ぼくみたいに炭焼きから見ると、ふつう熊野古道の通っているあたりは、山ではないんですよ。あれは「ぢげ」（地下）なんですよ。それで、山というのは、その地下からもう一つ離れたところで、それで、熊野の山の中に行つて、一軒家で、ふつう大工建ての、炭焼き小屋でない一軒家で、「お父さんいるか。」っていったら、「お父さん、山へいったよ。」ということです。まわりみんな山やのに、その地下でない、本当の山。山小屋しかない山がぼくらにとつては山なんです。

中上 そうすると、その山小屋しかない山というのは、歩いて一時間、もっとかかる場所ですか。

宇江 そうですねえ。林道のないところですねえ。

中上 林道のないところを、尾根を攀じ登ったりしながら、二、三時間かかるようなところを山というんですねえ。五、六分で行くようなところは、地下の世界なんですな。

宇江 家から、たとえ一軒家とか二、三軒の家しかない集落が沢山ありますけども、そこから見える範囲はやっぱり地下の感じ、ですね。

中上 単純にいえば、山つてわれわれは簡単に言うけど、山に住んでいる人々とつたら、山でもいくつも顔があるし、それから、自分の生活の範囲内、範囲外みたいなことがあって、むしろ、山に住んでいる人が山に行くっていうことは、自分の生活の範囲から越えてもっと彼方の方に行くみたいな、そういう感じなんですな。

宇江 そうですねえ。だから山でいても、例えばわれわれが備長びんちやうを焼いた炭焼きは、ぼくの子供の頃は、里に家がなかったでしょう。山小屋から山小屋へ点々と炭を焼きながら移っていくんやから。そういう山の中にいる人間と、山里ではあつても里に、大工の建てた家に住んでいる人間というたら、やっぱりちよつと違う世界のひとという感じじゃなかったでしょうか。

中上 これを機会にいろいろなことを聞きたいんですけど、山の生活をぼくはあんまり知らないから。こっぴつとると、ぼくは都会っ子ですよな。

中上 都会っ子がききますけどね。山小屋っていうのは、自分で建てるんですか。

宇江 そうです。

中上 はああ。食事なんかも自分でするようにして。

宇江 ええ。

中上 どんなふうにして建てるのかということのも知りたいし、それから、炭ですよ。炭はどんな木で作るんですか。

宇江 紀州備長炭の場合は、樫と馬目樫うばめがしですわね。

中上 いわゆる、「こっちの方言でいうと、」うばめとかいっているあれですわね。

宇江 そうですわね。

中上 うばめがしが「ばべ」っていうんですわ。東京の焼鳥屋とか鰻屋とか、紀州備長炭で焼いてますとか、麗しく書いたりなんかしてるけど、あれは特別な炭なんですわ。うんといんですか。

宇江 うんといと思いますわね。いわゆる炭の種類なんですわ、白炭と黒炭がありますわね。まあ、もちろん中上さん、「ご存知でしょうけれど、」そのどちらの炭も日本の各地にある訳で、そのルーツを探ると朝鮮半島から中国にもあるそうですけど。その白炭のなかでも備長炭が一番いいと。手取り早くいえば、現在、炭のなかで、一番値段のいいのは備長炭ですわね。

中上 その果無うばめというか、あそこ、果無になりますよわね。

宇江 はい、はい。

中上 中辺路のあたり、あの向こう側はそうですよわね。あの近辺では、「ばべ」、うばめがしなんかは沢山自生しているというか。

宇江 いえわね。うばめがし、ばべの自生しているのは海岸地帯の方がずっと多いんです。それから、この熊野ではばべが多いのは海岸地帯と、奥へいくと熊野川流域が多いです。ところが、日置川とか富田川の流域、果無の方にいきますと、ばべはないですね。樫が多いです。

中上 そうすると、宇江さんがやってらっしゃる炭焼きというと、そのばべだけじゃなしに樫なんかも。

宇江 樫は備長炭のなかに入ります。

中上 じゃあ、何と何が備長炭といえるんですか。

宇江 樫とばべだけです。

中上 ああ、そうですか。

宇江 例えば、同じ窯で樫を焼きますと、樫もかたい木でいい炭ができるんですけども、備長炭とは表示できないんです。ただの白炭です。

中上 値段も落ちるんですか。

宇江 落ちますわね。

中上 その白炭と備長炭というのは、火持ちが、一定の火が持続するってことな

んですか。

宇江 そうですね。いい炭というのは。

中上 ほかに何か、いい炭の条件というのはあるんですか。例えば、割れないとか、燃えないとか。

宇江 結局、それに尽きると思うんですけど。一定の温度で。

中上 一定の温度で燃え続ける。

宇江 それを団扇であおって温度を高める。だから一定の温度を保ちながら、高くも低くもできるんです。

中上 なるほどねえ。ということは、料理なんかに使うんでしたら、突然こうぱつと燃え尽きちゃったり、燃えがところかたたりとかすると駄目ということに。

宇江 そうですね。

中上 するとかたい木目の、かたい木だったら密度が濃いから、急には燃えちゃわないから、持続して、しかも……。

宇江 そうですね。温度は低いけれども。一番その対極にあるのは松炭ですね。

あの、鍛冶炭にするね。

中上 消炭みたいなやつですね。

宇江 そうですねえ。あれは、瞬発的に非常に高い温度が出るもんやから、精煉にいいんですね。

中上 かじ炭というのは鍛冶屋さんの。

宇江 ここでいうと、相筋にありますねえ、大川さん。ぼく、志古で親が炭焼いた頃は、新宮の大川さんへ、松の木を黒炭で焼いて売るし、ばべとか檜は備長炭にしてほかへ売る、そんなふうにして焼いてましたね。

中上 こういうこと聞くんですよね。ぼくのよく知っている人が、ほうぼうで、シーズンになると、シーズンというところと十一月ぐらいからかなあ。猪狩りに行ったり、猪撃ちに行ったりするんですが、そういう鉄砲撃ち、ハンティングをやっている人が何人もいるんですが。そういう人が犬を飼ってたりしてるんですが、猪の沢山でるところは、杉だとか桧だとかに林転してしまったところではなくて、もつと自然の状態の植物がたくさんあるところだと。そして、その実を食べたり、芽を、根っ子を食べたりしてて、虫もあるだろうし、いろんな小動物も生きていて、そんななかで猪も存在するんだと。だから、そういうところを狙ってゆくと、確実に猪がとれるんだと。そんなところ、熊野にはまだいっぱいあるんですかねえ。

宇江 そうですね。まあ、その通りなんですけど。いわゆる天然林ですねえ。そういう天然林というのは非常に少ないと思います。

中上 だんだん少なくなってきた？

宇江 そうですねえ。まあ、戦後非常な勢いで植林をしましたねえ。植林をする

前までは、新宮の方、みなご存知やと思いますけど、戦中、戦後の非常な伐材ですね。戦後の復興のために、あるいは高度成長の時代のために、天然林は非常に伐られましたね。そのあとに植えた植林ですけど、杉、桧、そうですね。まあ、熊野川流域の山林の面積は九割ぐらいですか、新宮は別にして奥の町村は。十津川は九十五%か九十六%ぐらいは山林で、十津川の場合は天然林がまだ半分ぐらいあります。ところが、中辺路とか本宮は、大体八割ぐらいが杉、桧ですね。

中上 はあ。

宇江 ふつう山というのは、川とか崖とかで二割ぐらいは植わらないから、戦後みんな頑張つて、植林のできるところは皆植えてしまったということですね。ほかなんか、まさにそれで飯を食ってきたわけですけど、ちよつと植え過ぎたという感じがしますね。

中上 弊害というのはやっぱりあるのですか。植林の弊害というのが今時分にでてくるっていうのが。

宇江 やっぱり天然林でないということは、問題があると思います。天然林が少ないというのは。

中上 炭焼きには、杉や桧はやっぱり駄目なんですか。

宇江 駄目ですねえ。ぼくもまた炭焼きをしたいという強い願望があるんですけども、原木を確保するのがむづかしいですね。非常に高いです。

中上 はあ。

宇江 昔は炭の値段にしますと、原木の占める値段は一割か二割ぐらいでしたけれど。今、パルプの業者から原木を買う人がいるんですけど、ばべを。そして、炭の売り値の半分は原木代に消えます。それだけ、ばべ、檜のある天然林がないということですね。

中上 残念ですね。残念というか、その、ひとつは昔から続いている山林というのは国の財産みたいだという意識がありましたよね。明治以降、とくにそういう考えがあったと思うんだけど。だから杉や桧をきちんと植えて、美林を育てて、いざという時に備えておくという、国柄というか、国自体がそういう考え方持つてて、振興してきたというのがあるんだけど、それが同時に自然の森を壊してしまうことになるっていうねえ。非常に残念ですね。

宇江 とくにぼくはいつでもめぐりかえし言わねばならんと思ってるんですけどね。せっかく、八割まで杉、桧の木を植えたにもかかわらず、外材の問題とか木材不況の問題とか、いろいろあって、せっかく戦後植えてきた植林が、手入れが非常に不十分ですね。とくに間伐、林の中が暗いでしょう。素人が入っていても杉林の中が暗い、異常だという感じがするでしょう。やっぱり、間伐をして、間引いて、日の光が地面に届かないと、杉、桧のためにならないですね。そういう詰んでいる状態では枝が枯れ上がっているでしょう。ひどいところでは、七割

も八割も枝が枯れ上がってるんです。それで、他所から来た人は、山を見て、「さすが熊野やなあ、一面のみどりやなあ」というんですけどね。ぼくらから見たら、いえいえ、下枝は七割ぐらい枯れ上がっているから、この山の七割は枯山ですよ、というのが、ぼくらの見方なんです。

中上 なるほどね。今は、宇江さんがそうおっしゃるということは、宇江さんというのは山の専門家なんですけど、生きている動植物というのは、半生みたいな、そんな状態なんでしょうね。

宇江 そうですね。われわれの子供のころからいうと、山のけものとか、川のおとか、いろんな昆虫とかいうのは。お話にならないくらい、少なくなっていますね。

中上 昔あたりだと、この紀伊半島に狼がいたっていうんですからねえ。

宇江 そうですねえ。

中上 その狼は絶滅してしまっただけで、そういうなんか神秘があってもいいですよ。動物がいっぱいいて、手の入れられない、手のつけられないような原生林がずうっと繁っててもいいですよええ。

宇江 まあ景観という面からいうても非常に変わってるんですね。まあ、熊野の山といえば、温暖性の檜とか樺とか、そういう照葉樹がある一方で、北方系の山毛櫸とか檜とか、果無に入っただけでいっただけの水櫛というのもありますし、そういう北と南の生態系が接点になって入り雑っているところですね。そういう点で、非常に自然の生態系としても日本の中で特殊な位置にあると思うし、おもしろいと思うんですね。それでまあ、ぼくらの子供の時から見ても、山の景観というのは変わりましたけれども、熊野詣に全国から来た人々が見た熊野の山々と、われわれが今の若い人が目にする熊野の山の景観とは全く違うものだと思いますね。

中上 なるほどね。まさにわれわれが大事にずうっと、われわれの先輩というか先祖というか、昔の人々が見てきたもの、それがいま滅びかかっている状態なんでしょうね。

宇江 これが、本当の意味の自然として再生するには、五十年とか百年とか、あるいはそれ以上の時間がかかると思います。

中上 原生林を切り崩して、せっかく植林した杉、 桧の守りすらもしないで、手入れをしないで、もう半分枯れ上がっているなんていうのは、なにやってんだって感じですね。

宇江 まさにそうです。

中上 何が原因ですか。やっぱり木材不況とか、そんなことですか。

宇江 ひとつは熊野の山、ずっと山ばっかして、木がいっぱいあるといっても、ぼくは五十二歳なんですけど、ぼくより年上の木は一割かぐらいしかないんですよ。みんなぼくより若僧なんです。木そのものが。だから、そういう若い木

は、いま育てる段階にあるけれども、金にはなりにくいですね。そういうことが林業にとつては一番に苦しいというか、時期じゃないかと思えます。それから家を建てても木材を使う部分が少なくなってきたというところ。

中上 ああ、いまは合板みたいなものですかね。

宇江 そうです。それから外国材。新宮の、新宮といえは国産材の、わが国屈指の集材地ですけれども、それでも半分位は外材を、新宮の製材所は挽いています。中上 ああ、そうですか。ぼくね、この間、意外なことで、意外なことが世界中で起こってんだなあと思うたんです。つまり、今一番こう大事なものがつきつき壊されているみたいな状態なんじゃないかと思うんです。そして、みんな今こそ目醒めて、身の周り振り返ったり、あるいは、先、先のこと考えたりしなければならぬ状態だと思っただけです。山もそうだし、材木の問題、ぼくらからいうと、原生林をもつと復活させないと駄目じゃないかと。そうしなくちゃ、熊野の本当の意味みたいなものがなくなっちゃう。紀伊半島全部駄目になっちゃうよというところ、ぼくは思ったりするんですけどね。この間ですね。三日位前ですかねえ。丁度、三日前まで、ぼく旅行していたんです。トンガ、トンガ王国へ行っただけです。あそこにも不思議なことに、トンガにも紀州人がいたんです。その後をぼくが追って。いろんなところへ紀州人は行ってるんですよ。オーストラリアの木曜島に真珠貝採りの仕事で行っていた。木曜島にいくと墓があるんですよ。そして、古座町出身、なになにとかね。もちろん、トンガもいるし、ニュージールランドもあるし、インドネシアにも行ってる、フィリピンのダバオというところにも新宮、このあたりの人間が行っている。ダバオの人は、串本の人だったけれど、行っただけ。ちようどぼく、そのトンガから戻ってきて、ぼくが取材から戻ってきて、アメリカから大学の先生が来てるっていうんで、アメリカにいたときに世話になりましたね。それで、じゃ夕食会開くからという連絡が入りまして、早速、ぼく、時差ぼけだったんだけども行っただけ。奥さんも一緒に来てたんですね。アメリカのコロンビア大学のヤンポンスキーっていう先生なんです。そして、仏教哲学をコロンビア大学で教えてるんですけどね。その奥さんが、ちようど和歌山の出身だったんですよ。和歌山の、和歌の浦の出身だったんですよ。それで、ああだ、こうだと、ぼくも和歌の浦よく知ってるし、なつかしいから。和歌の浦どうなってる、ああなってるっていう話になりましたね。その、例の眼鏡橋のことが出ましてね。「奥さん、あの眼鏡橋、ああ、眼鏡橋じゃない。不老橋のところ、新不老橋がでてるんですよ」といっただけ、「いっただけじゃない」といって、「うん、」「コンクリートの橋らしいんだけど」といっただけ、「何考えてんのかね」といって、話になって。仏教哲学をやっている「ロンビア」の先生も、「ええ、あそこに、不老橋のところ、変な新不老橋なんてできるのか、訳がわからん言いかただなあ、新不老橋だなんて」と、そういう話になったんですけどね。や

っぱりいろんなことで、考え直さなくちゃいかん状態だねえと。いま、同時多発的に起こってるんですね。そういうこと考えますねえ。

宇江 不老橋は、あの問題が起こってから、ぼくも行ってきました。ふだんはあまり和歌山、関係ないんですけどね。

中上 あっちの方へは出られないんですか。

宇江 素通りしてしまうんですよ。いまの話ですけどね。和歌山だけじゃなしに、田辺でも最近面白いことがあったんですよ。それは、いま田辺市はリゾート開発というのを熱心にやっているわけですけど、そのゴルフ場をつくる計画で、秋津川というところへ田辺の職員が行ったんですよ。その席で縷々あったそうですが、課長が「なんとかせないかん。いまに何とかしなかつたら」といろいろ話があつて、中辺路とか大塔、中辺路といえれば、いまぼくが住んでいるところですが、「中辺路と大塔はいまに墓とお寺しか残らんようになる」と発言したそうです。それで、問題になって、最終的には田辺の市長さんが謝ったそうですけど。そういう、リゾートの仕事にその部署の方は熱心になられるだろうけれども、そういう人の視野の中に、例えば、中辺路だったら山がある、林業があるという、そういうことを視野に入れていないやり方で、リゾートなんかをやってるんだなということが非常に明確にわかるんですけど。

中上 リゾートなんて、誰のためのリゾートなんですかね。都会の人のためのリゾートなんですか。われわれのことは、こっちに住んでいる人のことはほっておいて、よその人のためのリゾートなんですかねえ。結局、そういう立場だと、いつまでたっても、こっちは、紀伊半島なんていうのは、いつてみれば近代的な、新幹線から取り残されたり、例えば、電話の回線だって古いままだしね。この電話使って、パリヘアックス送れないんですよ。そんなふう古い電話のシステムになったままですよ。だから、近代がいつまでたっても遅れた近代でしかない。そういうままで、置かれて、ここの人間は、便利な人間らの植民地になつてますよね、ここは。そんな状態のままですよ。置いとかれたままだったら。

宇江 その田辺の秋津川というところなんですけどね。そこは、われわれの紀州備長炭の発祥の地なんですよ。それで、その隣に南部川村というところがあるんですよ。南部川村というのも、いつまでも備長炭は県の生産高の二十%ぐらいですかね。一番和歌山県でも備長炭の生産の盛んなところなんですよ。それで南部川村なんかは、村が率先して備長炭の保存とか後継者の問題とか、原木の確保とか、村が非常に力を入れているんですね。昨年は備長炭まつりなんてやるし、今年も備長炭の会館の建設を予定しています。一方、発祥地である、田辺の秋津川では五、六人炭焼きがいるわけやけど、全く何も炭焼きに対する手立てをしてないですね。

中上 ふううん。

宇江 それで、南部川村はゴルフ場はいらない。備長炭と梅でやっていくといっているんです。そのへんが同じ境をへだてていても田辺市と南部川村の違いですね。あの、リゾートとか考へるときに、ぼくは一番いい例であると思うんです。

中上 リゾートというのは、単純にいうと、ここにある山を削ってしまえとか、それから、古い由緒あるものをぶち壊して、新しい真直ぐな道をつけるとか、そういうことなんでしょうかね。いま、言っていることはそんなかんじですよ。いま、業者が言ったり、企業が言い出したり、一部の行政が指導したりなんかしているのは、そんな類のことですよ。だって山を削り取る、お金がかかって何が面白いんですか、そんなことをやって。ぼくはそう思いますけど。もうちょっとリゾート、つまり、人間らしい生活をして、ゆったりするんだったら、もっとあるがままの自然で……。

宇江 そうですね。

中上 そこに入って、もっと自然から、人間として生きることの痛みみたいなのを、自然から癒してもらおうみたいな、そういうことで、そういうことが一番いいんじゃないかと思うんですね、あるがままの海につかって、あるがままの山に入って、ね。それ以外何を、このあたりに、例えば、大レジャーランドつくって、ここで歩かないだろうしね。それから農薬撒き散らすゴルフ場つくって、ここで歩きまわって。歩きまわった人は、瞬間的に健康になってもかもしれないけど、ぼくらのグループにもさ、いま、ハンディが百きったとかいってるばかりのぼくだけだよ。だけど、ぼくからいうと、棒振り廻してさ、ボールをころがしてやるでしょう。そうやって、ああ、日焼けしたから健康になったと。そやけど、農薬も浴びてるんですよ。そりゃ、絶対二十年後ぐらいになってさ、癌になっただ。つけを自分で払うんだからね。ぼくはそう言いたいですよ。そんなことをして、なにが面白いんだ。そんなんだっただ。つまりあるがままの海にいつて、貝拾いしている方がいいと思うし、山の中、ふうふう歩く、その方がよっぽど健康にいいって思うんですけどね。

宇江 そうですねえ。ふうふう山へ入って歩くとか、海へ行って泳ぐとかということよりか、そういう設備、ベンチを置いたり、建て物建てたりという方が、今の日本人は、いいと思う人が案外、多いんじゃないかな。

中上 いや、それは、つまり、せいぜい、本当にね、文化的なことじゃないですよ。そんなことはね。つまり、一番ばかげていてね。おそろく、大体、千葉あたりの発想だね、東京でいうと。浜幸かなんかの発想じゃない。大体、浜田幸一なんて、あいつ、人類とこう思えないもん。国会でさ。名札をさ、パタパタパタさせて、ウルサイとどなって、そういうことやってるんですよ。なんか、ぼくはそういうさあ、自然に逆らったって無理ですよ。で、文化っていうのは、ぼ

くこう思うんですよ。アグリカルチャーってのがあってしょう。農業ってのは、もちろんその、農業というのはカルチャー、農業でも何でも、人間の営為というのは、自然をちよつと損ねてしまつてとこがあります。例えば、炭焼きが木を伐つて炭にする、そこでちよつと損ねてしまつてしまうという。それを、大だ的にばさつと全部、木も何もかも一切なくしてしまつて、そこで、何の役にも立たないゴルフやるわけじゃないですからね。ちよつと損ねるということがあるわけですけど、そんなに目茶苦茶に損ねて、何が人間が生きていけるんだと思うんですよ。

宇江 まあ、炭焼きの場合はね。熊野の山は、果無の中腹にまで窯がありますけどね。古い窯は、江戸時代からもう、何しろ、水野の殿様は江戸で炭屋で仇名されたぐらい、炭が新宮藩の重要な産業だったもんで、まあ、繰り返し焼かれています。それで、炭の原木を伐る場合には、ちよつと、これ位の、手首程の、炭に適した太さのものを伐るんです。で、こんな細いものは邪魔にならん限りは立てておくんです。だから、山が裸になるといふことはないですね。とくにまあ、南部川のなんかの炭は、ばべの細い一本一本でも非常に大事に立っていますので、炭に焼ける太さになったときに、伐ってきて焼くんですね。

中上 ちよつと、手首ぐらいの太さですか。炭にするのはね。その一俵っていうのは、炭いくらですか。備長炭で。

宇江 窯出しで、五、六千円でしょう。市場へいったら一万円以上。一俵いうたら、十五キロです。

中上 十五キロですか。これはあれですよね。ぼくのよく知っている友達熊野大学の仲間がいるんだけどさ。そこでへらへら笑つてる、松本巖というんですかね。彼もゴルフを始めたんだけどさ。けしからんと思うけどさ。彼がよく知っているロクさんっていう人がいるんですよ。山の中に住んでいてね。ぼくね、彼を、ロクさんっていう人間を、山の中で生まれて、山の中で生きて、おそろく山の中で死んでいくんでしょうねえ。彼が本当にもう、仙人みたいな人なんですよ。ご存知ですか。

宇江 ええ。

中上 あ、そう。会つたことがありますか。

宇江 あのね、『地の涯至上の時』に書かれている、ロクさんですね。実は、その松本さんのお呼びで、みの谷へ行きまして、ロクさんの小屋で一晩泊めてもらつて、焼酎飲ましてもらつたんですよ。

中上 あつ、そう。

宇江 それで、どんな感じかといいますよね。あの人は炭焼きやと、ぼく思いますがね。全くぼくと一緒みたいな感じですよ。

中上 ぼく、彼をね、松本という同級生から紹介されてね。ものすごくびっくり

したんですよ。ものすごくうれしかったんですよ。というのは、なにせ、朝起きて雨降っていようと、山仕事に出る。少々の雨だと合羽着て、朝早く起きて、尾根を一つ二つ越えて、さつき宇江さんがおっしゃった山へ行くんですよ。そこで、着いたあたりで日が昇ってきて、明るくなってきた、木を伐りはじめたり、植林をしたり、枝打ちをして、仕事を終って戻ってくる。そういう生活を毎日してるんですよ。ぼくはこういう、作家でしょう。作家というのはね。精神では、あるいは心では、そういう自然とともに生きる人と一緒に俺はいると。で、精神では本当に、まさにその、俺はロクさんと同じ人間だ。ほかのゴルフをやる人間と同じじゃない、人類がちがう。そして、俺はロクさんと同じ人間だ。ゴルフやる奴と全然ちがう惑星の存在だと思うんだけど、現実には、実際にいうとさ、ゴルフをやる奴よりもっとひどい状態ですね、作家というのは。とくに、東京なんかで生きていると、目茶苦茶ですよ。で、人と会うんでもやっぱり酒ですよ。酒飲んで、原稿書いてない時は酒飲んで、なんか騒いでる。とにかく体にいいことは何もしてない。酒飲むでしょう。それから煙草吸うでしょう。コーヒーをがぶ飲みするでしょう。そして、食ったり、食わなかったりでしょう。で、すぐ議論するでしょう。人とけんかするでしょう。本当に、ろくなことしてないんですよ。まさに、現実の存在としちゃ。なんていうの、自然に生きる人とはまるっきり正反対の、人工的な、どうしようもない、そういう実存ですよ。存在ですよ。それがね。新宮なんか来ても同じなんです。こっちは来て、たまに自分の親の家だからゆっくりしようかと思っても、悪い人いるんですよ。飲む、飲もう、飲もうという。それで、遂になんか、ぼくを誘い過ぎてさ、それで、酒の為に脳溢血起こした人いるんだけどさ。松根さんっていう。そこにいるんだけどさあ。松根久雄さんって、酒で体を駄目にした人なんです。だけど、ここでこう飲んで、騒いでいるでしょう。やっぱり二日酔いでも起こるんですよ。東京でも二日酔いだけ。毎朝起きると。こども二日酔いになるんだけど。二日酔いときしかもこういう風景です。二日酔いで朝起きて、しようがないなあとぼおっつとぼけて、昨日もまわったなあ、ここは新宮なのに、東京と変らないなあ、酒飲んでしまったなあと思つて、コーヒーでも飲もうかと思つて出るでしょう。そうすると、外に出ると雨が降っている。で、雨の中、傘なんかささないで、松根さん呼び出して、そうと思つて、とぼとぼ歩いて、ふつと山見るんですよ。山で雨が降っている。ああ、あそこでロクさん働きに行つてると思うとね。自分がなんて馬鹿な人間なんだと、まず思つんですよ。ロクさんは今働いている。雨なのに。シコシコシコシコシコと、なんていうのか、木をカサカサカサカサいわせながら、それこそ、蚕が桑の葉っぱをチョコチョコかじっていくみたいに音立てて、山の斜面で伐つていると思つんですよ。ぼくそう見て、自分がなんて馬鹿な人間なんだろうと思うけど、同時にああいう人がいるから、小説家も存在できるんだなあと思つて、

ぼく、すごい、救われたんですよ。そういうふう、山とともに生きてて、あるいは、山とともにだけじゃなくて、雨とともに生きてるといふか、あるいは空の明かりとともに生きているみたいなの、そういう人がいてくれるというんで、ああこの俺はだから、こういう俺みたいな奴も存在できるんだし、俺は小説書いてられるんだなあと思うんですよ。そういう、それが一番大事なんじゃないかと思うんですよ。そんな人がいてくれるってこと。

宇江 まあ、山でいうと、なんていうんかなあ。夜明け、日が暮れるという時間の推移と自分の日常生活とが全く一緒なんです。朝、小鳥がチツチツと暗闇のなかで鳴く頃に目が覚めるんやから。それで日が沈む頃になると、もうねむうなるし、そして、ぼくやったら焼酎、毎晩三合ぐらい飲んだら、コテンと行ってしまふんです。そういう焼酎というのは、山小屋で飲む焼酎というのは、なんていう豊かな感じというか、安心な感じというか。例えば、街に出てきて飲みますと、あつ、帰らないかんなあとか、きれいな女の子よろよろしよったら気になったりとか、非常に不純な酒になるんですよ。

中上 なるほどね。ロクさんは新宮の街へおりてくると、風邪ひくっていうんですよ。どうですか。宇江さんは。

宇江 そうですね。山小屋で、十日とか、半月ずっと人の顔見ないでおるでしょう。そしたら、やっぱりちよつと鬱屈してくるですよ。そして、街へいったら解放されるんですよ。ぱっぱつと、空気穴抜けていくみたいに。それでまあ、二、三日街でぶらぶらしよると、ああ、もう街ですることないなあ、もう山へ行かんなしようないなあ。そういうことですねえ。

中上 やっぱり、その山に入っていると淋しいってこと、あるんじゃないしょう。

宇江 山で働いている人でもね、山小屋で一人寝ること、できない人が案外多いです。で、淋しいと思う人もあるやろけども、ぼくは、一週間位人に会わなくて、山ばっかし眺めてても、そんなに退屈しないですね。焼酎があつて、本があつて、中上 まあ、ぼくが、想像できるような、おそろく都会に住む人間にとつたら、山というのは何もなし、静かだと思っただけど、山というのはおそらく騒々しいと思うんですよ。風の音だ、虫の声だ、鳥の声だっていうのがね。むしろ、わいわいと、この新宮の、大王地の近辺なんかで、カラオケ唄って騒いでいるより、もっと騒がしいと思うんだけど。山なんてのは。

宇江 まあ、しかし、騒がしいときと、静かな時とあるでしょう。

中上 まあ、だけど、不思議な感じがしますよ。ぼくは、いま意図的に分けてもいるんだけど、やっぱりぼくは、ロクさんと同じ人間でありたいと思うし、思うけど、実存と生活態度としては全然逆な生活をしているわけでしょう。作家だし、まあ甘いといえはいえるわけだけど、酒ばかり飲んで、夜更している、不規則だつていえるしや。だけど、宇江さんは、作家でありながら、同時に山人

である、そういう二つを兼ねているじゃないですか。

宇江 まあ、あの、三十から四十までぐらいまでは、山でも組の責任かなんか持っていて、そういう仕事の責任もあるし、がむしゃらに働いたですね。働いて、もう阿修羅の如く働いてやね。夜は焼酎を飲んで、ノックアウトなんですよ。でんと、ひっくりかえって。そういうときが、まあ、あの、三十日とか続いたら、ときおり、ああ、俺もたまには書いてみたいなあ、と思う折はあったですね。

中上 あっ、そうか。

宇江 まあ、でも、ふつう現代人はそういう山小屋生活には耐えられんと思えますよ。あの、例えば、現場へ森林組合の職員とか、営林署の職員が来るでしょう。

そして、測量なんかに来るわけで、最初はいつまでおるねんというところ、おう今度は五日かけてやるつもりやぞという調子でいつてるけれど、もう二日目ぐらいから帰りたくなって、猛烈にスピード上げて仕事して、三日目には帰ってしまう。そんなんですね、ふつうは。

中上 ぼくなんかこう、考えますよね。つまり、山と都会だとか、そういう二分法みたいなのを考えちゃうんですよ。だから、山の時間と都会の時間が、もちろん、時計ではかる時間は一緒かもしれないけれど、あるいはこう、太陽が昇って、沈むというのは一緒かもしれないけれど、時間の流れ方が全然違うんじゃないかとかね。だから宇江さんが山の時間と街の時間を二つ、要するに時計を二つ持っているっていうことに、ぼくは驚くんですよ。と同時にそれをコントロールできるといふ。そして、ロクさんの場合だったら、その、街の時計を持っていないから、街に来たら狂っちゃってる、風邪引いちゃって、わけわかんなくなっちゃう。で、街の時計しか持っていないぼくなんか山に行ったら、山の時計持っていないから、わけわかんなくなっちゃう。ぐるぐるとなっちゃって。二つ持っていることが、ぼくは驚異ですよ。それで、時計っていまいったけど、時間っていったけど、時間って、もう少しずらして、ずらして考えると、社会っていてもいいかもしれませんね。山の社会っていうものを持っている。山のこう社会ってもの、そして街の社会ってものも持っている。その二つを、両方持っていることを、ぼくは非常にびっくりするんですけどもね。

宇江 まあ、しかし、ぼくなんか、例えば、背広を着るといふのは、街へ来る時にだけ着るのであって、何か街の方へ調子合わして、街でやっているという。掃いたら背広脱ぎ捨てて、靴脱ぎ捨てて、地下足袋履いて、本来の自分に帰ると。

中上 さっき、ちよつと文学的になるかもしれませんがね。『ちげ』と山という分け方なさいましたよね。

宇江 はい、はい。

中上 ね。ぼくらからいうと、街から見ると、山てなのは地下も山も、二分法は見えないんだけど、その山の方にいくと、『ちげ』と山という二分法があると

いう、そういう見方ですよ。だから自分、テリトリーがあったら、その中心と周縁だとか、そういう分法つかいますとね、分法というのは分け方なだけで、分け方使えますとね、どこまで行っても同じような構造があるんじゃないかと、そういう、だから、さらに地下から山の方に入っていたって、山に入っても、又山とさらに向こうの山ってのがあるんじゃないかっていう、そういう時間も分割していけるっていう、そんな妙な、曼陀羅図っていうか、そういう時間の曼陀羅図、変な、だんだんだんだん、小さくなっていくような、そういうイメージが浮かぶんですけどね。その山に行ったら、又さらに向こうの山もある、そういうことってないですか。

宇江 その答えになるかどうかわからんけれど、中上さんの小説の中に、新宮の人が山へ行く、働きに入る話あるでしょう。

中上 ええ、ええ。

宇江 新宮の人は山へ働きに入ったら、多分ロクさんと一緒に働くことになるって思うんやけれども、その人は山の仕事が終わったら、また新宮へ帰るんですね。逆にロクさんの場合は、そこが栖であって、たまに里へ食べ物とりに行くことがあっても、また山へ帰るんですね。そのへんが同じ山の中に住んでいても、まるつきりちがうというか、わかれるところだと思えますけど。

中上 とにかく、長い仕事だったとしたら、大体小屋掛けするんでしょう、どこでも。

宇江 ええ、そうですね。

中上 いま、最長で小屋掛けするってのはどれぐらいなんですか。一ヶ月位もう泊り込むなんてことあるんですか。

宇江 あのね、そうですね。最近は林道ができたから、山小屋なんて少ないんですよ。ロクさんなんて、もう稀少価値ですわ、山人間の。もうみんなマイクロバスで通ったり。

中上 昔は、こう聞いたところによると、米と味噌とか、こう背中に背負って、それで、三人か四人ぐらいで入って行って、小屋を掛けて、それで仕事に入ってたっいたらしいですけどね。

宇江 そうですね。

中上 いまもそんな形あるんですか。ごく一部でも

宇江 うーん。まあ、ないことはないと思いますけどね。

中上 ぼくら、都会にいと、新宮が都会だといっていると、聞いている奴、みんな笑うんじゃないかと思うんだけど。都会にいますとね。つまり、熊野っていうのは、ぼくら熊野に住んでいて、熊野の人間なんだけど、意識は、ぼくは東京に住んでても、熊野に住んでるって意識なんだけど、だけど、熊野の山の真中にはものすごいでっかい杉だとか桧だとか、杉桧とかじゃなくても、例えば、馬目

檜のものすごいのかいのだとか、檜の木のものすごい馬鹿でかい、お化けみたいなやつがありそうな気がするんですが。イメージとしてですよ。ないですか。

宇江 あ、そうですね。また、具体的な話になりますけども、熊野の天然林でもちろん興味があると思いますけども、行かれるんだったら、瀨の林へ入られたことありますか。瀨八丁の。

宇江 瀨八丁の、右岸ですね。右岸で八十ヘクタールぐらい天然林があるんですよ。あそこは、檜とか、いわゆる熊野の代表的な木が繁っていて、非常にすばらしいですね。八十町歩ぐらい、ああいうのが残っているのは少ないと思います。山毛櫟林なんかは大峯山なんかへ行ったら、もちろんありますけれども、瀨八丁にあるのは、いわゆる熊野の山ですね。それからもう一つは、大塔山です。大塔山でも、日置川奥の前の川流域の、大塔山へ行くと、これ、大方千ヘクタールぐらい、主に檜の林があるんです。こんな檜が（腕を輪にしてみせて）、林立しているんです。

中上 ほう、腕でかかえ切れないぐらいの。

宇江 そう、そうです。

中上 大人が二人ぐらいで抱えきれないぐらいで。

宇江 そんなことはないですが、ひとりで抱え余るような、こんなぐらいの。それがざらにあるんです。それが六、七百ヘクタールありますから、新宮市よりも広いんとちがいますかな。

中上 はあ。

宇江 あれはものすごい魅力的です。

中上 大人がひと抱えするぐらいの大きさの檜の木が、もう新宮市を超えるぐらいの領域に全部わたっていると。

宇江 あるんです。山毛櫟林なんてのは、東北地方など行きますと、まだかなりまとまった面積があると思いますけれども、いわゆる熊野の山としての檜の林が、あんだけまとまってあるのは、本州では他にないと思います。非常に魅力的な山ですね。

中上 ぼくは一度ね、亡くなった、あの人、日本浪漫派のだけだったっけ。保田與重郎さんに、ぼく、お会いしたことあるんですよ。ぼくのテーマは、保田與重郎さんに会って、質問ぶっつけてみようと思ひまして、昔の伝説的な、それこそ、右からも左からもいろんなことを言われていた人ですよ。その人にお会いする機会があるというので、一度質問ぶっつけてみようと思ひましてね。あの、大和の人でしょう。で、「熊野と大和とどっちが偉いか言ってくれ」って言って、そういう、ぼくはもちろん、熊野が偉いって論立てようと思っただんですけど。大和と保田さんというなら、いや、そう思わない、熊野の方が偉いって、論争を挑もうと思っただんですけどね。そのとき、熊野と大和とどっちが偉いっ

て聞いたたら、突然、「君は玉置山の大きな樟を見たことがあるか」と聞かれたんですよ。ぼくは、その質問がなんつていうかその質問に対する切り返しかたが、まあ突飛だったから、どんな意味含んでるんだろうと思って、しばらく絶句したんですけどね。ありそうですね。大きな樟も。

宇江 あの、玉置山は標高千メートルあるから、樟があるというのは、かなり不自然ですね。人工的に植えれば、もちろん育つかも知れませんが。

中上 なんか、保田さんは見たような口調でしたよ。

宇江 今度行ったら、確かしてみしよう。

中上 ぼく、まだ確めてないですよ、樟は。ぼく、そういうあれで、熊野のまんなかにも、いつてみれば熊野といえは聖域だし、紀伊半島も、ものすごい大きな意味を含んだ土地ですよ。紀伊半島自体が、そのまんなかにも、大きな、本道の聖域としての、そういう原生林があると聞いて、安心しましたけどね。

宇江 大塔山はご存知の古座川をのぼって、松根の方から行かれたら、今やったら道があつて、すぐに入れると思います。

中上 そのあたりに猪だとか鹿だとかが住んでるんでしょうかね。

宇江 そうですね。熊は和歌山県では非常に少ないですけど、大塔山にはまだいるといつてましたね。まあ、樫の実が非常に豊富だから、猪なんかもあるし、地元で聞いたたら、ぼくは猟師さんと一緒に入ったんやが、今度禁猟区になるんですね。だから、地元の猟師さんも、いいことやと喜んでましたけどね。もうそんなに捕らなくてもよいと喜んでましたね。

中上 なんかこう。

宇江 もう時間ですねえ。

中上 そうですか。とりあえず、宇江さんに山の生活、山の文化史っていうんですかね。そういうお話を伺ったんですけど、どうもありがとうございます。た。

宇江 どうもありがとうございます。